はしがき

－「介護退職ゼロ作戦」を新しい社会運動に－

ケアメン－私たち男性介護者と支援者の全国ネットワーク（男性介護ネット）に関わる者にはようやく耳に馴染んだこの言葉だが、一般にはまだまだ新語・造語の類に違いない。妻や親を介護する男性のことをいい、その数、実に100万人を超える。介護者の3人に1人を男性が占める時代をシンボリックに称しているのがケアメンだ。

これまで介護は辛くて嫌なもの、できれば避けたいものとされてきたのかもしれない。育児や介護などケアを排除して成り立つ働き方も「デキる」ビジネスマンの典型とされてきた。四半世紀前、「24時間戦えますか！」とサラリーマンを鼓舞し圧倒的に支持されたドリンク剤のCMもまだ記憶に残っている。しかし、ケアを組み込んだ暮らし方や働き方のほうが、実は人生をより豊かにできるのではないか、と私たちは主張している。家族等のケアにアクセス可能な暮らしをもっとポジティブに打ち出してみたい。ケアを基準にすればこの社会が抱える欠陥が炙り出され、改革方向がよりクリアになるのではないか。ケアメンに込めた私たちのメッセージは概ねこのようなものだった。

そして、私たちは、仕事や家計、家事、孤立など介護する男性の諸課題を社会化するためのムーブメントのことを、ケアメン・プロジェクトと銘打って新しい介護者運動にしようとして呼び掛けている。

2012年春、このプロジェクトにまた一つ力強いフレーズが加わった。「介護退職ゼロ作戦」がそうだ。男性介護ネット3周年の記念式典（2012年3月3～4日）に同ネットの応援団・樋口恵子さんからメッセージを頂いた。全文は男性介護ネットのHPに掲載しているのでぜひお読み頂きたいが、以下のような応援歌だった。

「（前略）男たちが介護から語るとき、世の中が変わる／さあ、男も女も、介護退職ゼロ作戦／介護と仕事両立社会へ／男たちと同じように女も仕事と、社会とともに生きる／介護する人が幸せでなかったら／介護される人も幸せになれません」

仕事が生活の全て、時間の全てのような生活を余儀なくされてきたのが多く

の男性の実態だ。中高年の男性の場合は特にそうだった。親や配偶者の介護が始まれば、仕事と介護の板ばさみなって、結局は退職に追い込まれる。多くの人がそのような不安を抱えながら暮らしているはずだ。介護による退職は、介護者の社会的経済的な安定を奪うばかりでなく、同僚や友人という親しい関係、コミュニティをも壊していく。特に、地域との縁を作ってこなかった男性介護者の孤立は、虐待や心中等々といった不幸な介護事件の温床としても深刻な影響が指摘されている。家族の大黒柱という規範が過剰な家族的責任を呼び込みさらに葛藤を深めていく。

だが、確かに介護は負担も大きいが、そればかりではないということも多くの介護者が指摘している。ケアを通してささやかではあっても喜びや希望に気付く暮らしもある。厳しい現実への介護者発の抗いのプロジェクトが、ケアを包み込むコミュニティを仲介すると、私たちは信じている。

最新データ(2010年国民生活基礎調査)では男性介護者は120万人、その3分の1以上は働き盛りの60歳未満だ。60代前半の男性でも8割近くが就労し、その半数は正規社員ということは既に2010年国勢調査が明らかにしている。毎年の介護退職者は政府が事業者を通して把握しているだけでも10万人を超えているが、実態はこれを遥かに超えていると思われる。またその予備軍は更に膨大な数に上っていることは容易に予測できる。もう一部の人たちの問題だとして無視することは誰にもできなくなった。ここに介護と仕事のテーマが行政や企業も巻き込み社会問題化せざるを得ない背景があり、私たちが介護と仕事と暮らしが折り合える環境を要求する根拠があるのだ。

本誌は2012年11月の11日(日)「介護の日」と23日(金)「勤労感謝の日」に男性介護者と支援者の全国ネットワーク(男性介護ネット)と共同で開催した「介護退職ゼロ作戦！フォーラム2012」の記録を収録している。2012年は他にも長野県や福岡県、北海道でも同種のイベントを開催してきた。次年度以降も私たちの声を束ねて世に問うて行こうと考えている。継続こそ力、なのだから。

「介護退職ゼロ作戦」を社会運動に－読者諸兄姉、街角で、各種メディアでこの声に出会ったらぜひ立ち止まって傾聴して頂きたい。一緒に運動の一翼を担って頂けたらなお嬉しい。

2013年3月10日

立命館大学人間科学研究所
男性介護研究会 代表　津止　正敏